

## マハーシン・A・G・H・アル＝サーフィー博士

縄田 浩志

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所 (Institute of African and Asian Studies) の所長であるマハーシン・A・G・H・アル＝サーフィー博士 (Dr. Mahasin Abdel Godir Hag al-Safi) が、1994年10月10日から24日まで国際交流基金文化短期招聘により来日された。

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所は、ハルトゥーム大学における初めてのインターディシプリンの研究を行う機関として、1972年に創設された。創設以来、スーダンの歴史、文化、言語、政治、経済、宗教などに関する調査研究を推進するとともに、その成果を英語とアラビア語で出版してきた。

歴代の所長であるユースフ・ファドゥル・ハサン教授 (Professor Yusuf Fadl Hasan) やサイド・ハーミド・フレイズ教授 (Professor Sayyid Hamid Hurreiz) も来日されたことがあり、日本人研究者との関係も深い。その関係の始まりは1978年にさかのぼり、栗本英世、吉田憲司の両氏が訪れたのが始まりである。その後もスーダンにおける調査の現地協力機関として多くの日本人研究者が訪れ、友好を結んできた。慶応義塾大学地域研究センターとの間には研究協力の合意が交わされている。また、この研究所では、大学の正規過程として日本語も教えられている。

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所は研究機関であると同時に大学院生を教える教育機関でもある。3つの学科に分れており、政治・経済・歴史を扱うアフリカ・アジア研究学科、言語を扱う言語学科、民族・民俗・物質文化を扱うフォークロア学科がある。筆者も、フォークロア

学科に1992年から1994年まで在籍し、学生としてマハーシン博士にお世話になった。今回は、マハーシン博士の日本滞在中に何かお役にたてればと、来日期間の大半を同行させていただいた。

マハーシン博士は、2週間という限られた時間ではあったが、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所の研究・教育分野に関連する多くの日本の研究機関を訪問された。訪問先を列挙すると、アジア経済研究所、出光美術館・出光美術館大阪、江戸東京博物館、京都大学総合人間学部・アフリカ地域研究センター、慶応義塾大学地域研究センター、国際大学中東研究所、国立国会図書館、国立民族学博物館、古代オリエント博物館、中近東文化センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京国立博物館、東京大学文学部・東洋文化研究所、東京都立大学人文学部・理学部、東洋文庫、早稲田大学古代エジプト調査室 (50音順) である。

また、2つの講演も行われた。1つは、アフリカ学会関東支部において、「Kenya Somalis: The Shift from 'Greater Somalia' to Integration with Kenya」という題目で講演された。また、中東学会の講演会においては、「Sudan and the Horn of Africa 1974-1992」という題目で講演された。

マハーシン博士のご専門は、スーダン、東アフリカ、「アフリカの角」地域の近現代史である。ハルトゥーム大学を卒業後、英国のエジンバラ大学でアフリカ学を専攻され、1972年に博士号を取得された。その後、ハルトゥーム大学講師、サウジアラビアのキングサウジ大学助教授を経て、現在の職にあられる。



マハーシン・A・G・H・アル=サーフィー博士

マハーシン博士の父上は、スーダンの首都ハルトームの州知事をされていたとうかがった。幼少の頃からつちかわれた広範囲の物事に対する知識と知性に加えて、学生の頃はケニアの海岸部のムスリム社会に住み込んでの現地調査もされたという、たぐいまれな行動力と強固な意志をお持ちである。筆者も、スーダン留学中にはマハーシン博士とおつきあいを通じて、スーダン女性の細やかさと強さを学ばせていただいた。

日本滞在中もハード・スケジュールにもかかわらず、疲れた様子はみじんも人前では見せず、歓待を受けた全ての方に誠意をもって接しておられた。京都の料亭では、おかみさんの戦時中の生活や食べ物のお話を熱心に聞かれ、深く感銘されたご様子であった。また、民博の展示を見学中に多数の小学生らが群がりサインを求めたときも、笑顔

で快く引き受けておられた。日本食も気にいられたようで、特に魚料理は大好物であった。日本人顔負けに秋刀魚の身をきれいに食べた後、はらわたまで本当においしそうにたいあげられた。

2週間の滞在を終え、次の訪問先である中国にたたれる際に、滞在中に撮った写真を差し上げると、「この写真を見れば日本滞在中のすばらしい思い出がいつでもよみがえることができる」と喜んでおられた。

筆者は1995年3月にスーダンを訪れ、アフリカ・アジア研究所でマハーシン博士と再会する機会があった。開口一番に聞かれたことは阪神大震災の被害のことで、日本で会われた方々のことを非常に心配されていた。そして、話が日本滞在中のことに及ぶと、傍らにあった彼女のハンドバックから一枚の絵葉書を取り出された。それは、出光美術館大阪を訪れた際にいただいた仙厓の「○△□」という作品で、墨で○△□とかかかっているものである。「この絵葉書をいつもハンドバックにいれ、時間がある時にこの絵が意味することは何かと、思索にふけているのです」とおっしゃっていた。

それを拝見した筆者にも、博士が日本滞在中の多くの方々とのご交際を通じて、日本人と日本に関しての何か新しい、そして同じ人間としてより深い親しみをもたれたことがしみじみと伝わってきた。

「今後とも我々のさらなる親交の発展を願いたい」というマハーシン博士のメッセージを受け取り、スーダンをあとにした。

(なわた ひろし 京都大学)